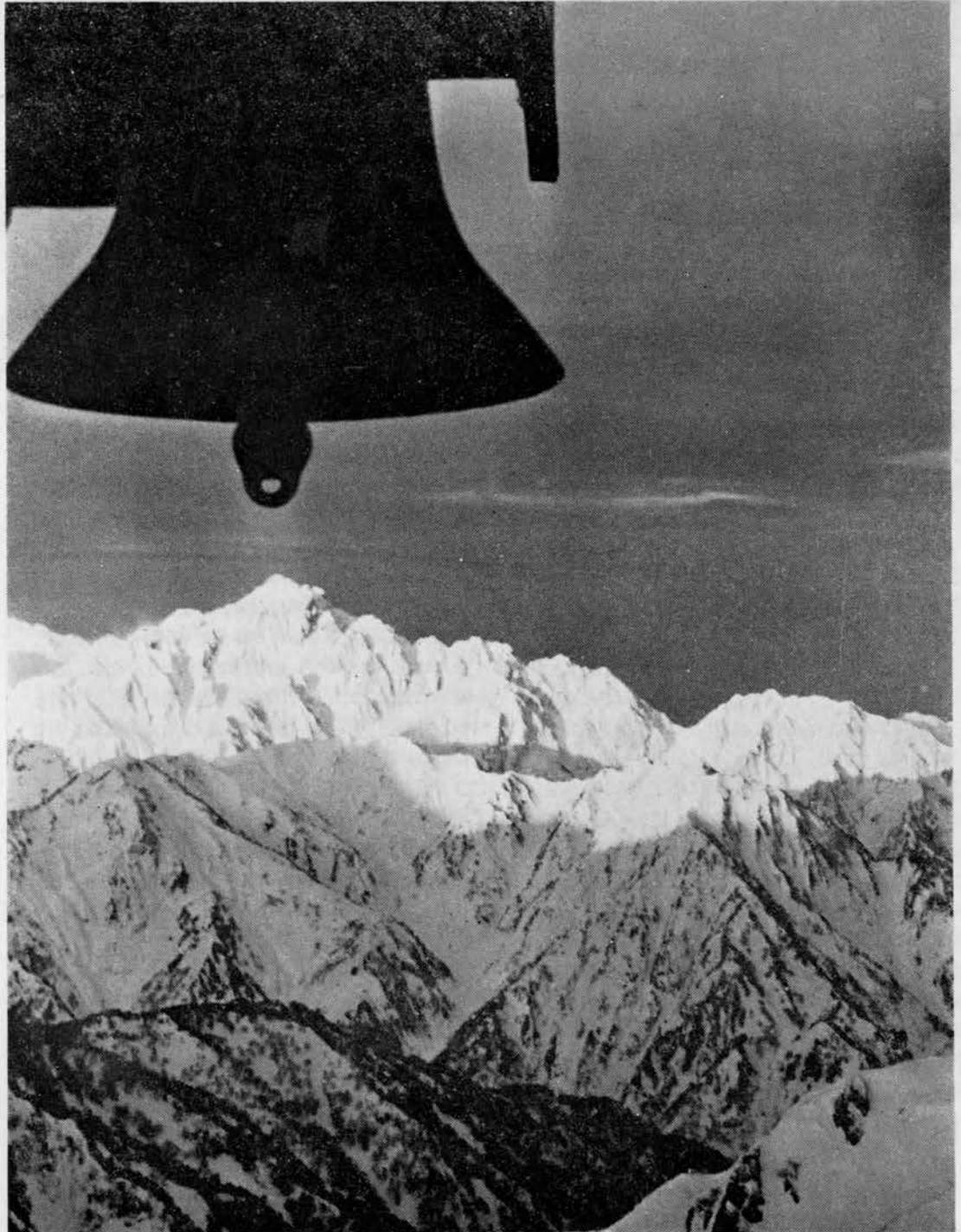


毎月1回25日発行

第3種郵便物認可(昭和35年7月26日) ①

山と博物館

第7巻第3号 1962年3月25日 大町山博物岳館



三月の劔岳

唐松小屋より

撮影 千葉 彬 司

録音あれこれ

1 近畿の山々を歩いて

村中 向陽



録音中の筆者（右）

近畿地方の山は大峯山脈、八経ヶ岳の1915mを最高としているので鳥類分布も亜高山帯以下に限られる。カラ類と称されている。シジユウカラ科のシジユウカラ、ヤマガラ、コガラ、ヒガラ、エナガ、等が比較的多く、ゴジユウカラ、ホトトギス科、ヒタキ科、等がこれに次ぐ。

野鳥を録音するためには、マイクロホン、マイクケーブル、録音機、集音機、録音テープ等、大体5~6貫の荷をかついで一週間近く山へ入る。沢から尾根へ、尾根から嶺へ野鳥の後を追いかけてまわす訳であるが苦勞の割にうまくゆかず、それだけに良い声が採れた時ほどうれいことはない。

昨年夏、大峰、山上ヶ岳(1719m)へ登った時の事、洞川の溪流でミソサザイに出合った。早速集音機を向けたのであるがレシーバーに聞こえるのは河音ばかり。せっかく御気嫌で鳴いていてくれるのに、川の音さえなければと残念でならない。しばし録音スイッチを切るのも忘れ彼氏を眺めていた。ミソサザイは知る由もなく盛んにさえずっている。すると何を思ったのか、さえずりを急に止め山の方へ少し飛んだかと思うと、私の方を向いて二声三声。逃げられたかと後を追ったのであるが、ミソサザイはまるで私の道案内でもするかの様に適当に間隔をおいてとんでくれる。そしてとある木に止まるや高らかに唄い初めたではないか。溪流とはかなり離れているのもう邪魔な音は少しもない。このミソサザイが電波にのったのはいうまでもない、私は山へ行く度に、もう一度このミソサザイ君に会いたいものだと思うのである。

しかしこの様にうまくゆくことはめったになく、失敗も数多い。

オオルリを求めて沢を行ったり来たりしていた時のこ

と。幾ら探し歩いても出会わないので、尾根へ出て景色でも眺めながら一息入れようと登って行った。そしてもう一息ふんばれば頂上といふかなり急傾斜のガラ場で目指すオオルリを発見した。荒い息づかいを懸命に押さえて、録音スイッチを入れ、レシーバーに耳をすませたオオルリは目と鼻の先。自分の心臓音が大ききこえる。ところがその時ふと妙な事に気付いた。レシーバーからブーンという音がかすかに聞こえてきて、それが段々と大きくなっていくではないか。虻だ、そう気付いた時は耳中虻の音だけ、右手を大きくふりまわした瞬間、足許の石がガラガラくずれ、機械もろともスリップダウン。

もちろんオオルリは影も形もなかった。尻はうつ、虻にはさされ、オオルリに逃げられる、で文字通りの三輪坊とんだ虻蜂とらずであった。

蝉を録音に行って小便をひっかけられたとか、セツカの鳴声と虫の声を間違ったとか、各人ともこういった失敗談には事欠かぬのである。自然界の動物や野鳥・虫の声を録音するためには普通山野へ出掛ける訳であるがキリギリス、コオロギ、クツワ虫、等の虫に関しては採集してきてスタジオで鳴かせる事がある。これは虫の鳴声が非常に高い周波数成分を含んでいるため、外録用の小型録音機では完全に高域まで録音出来ないためにスタジオで特性の良い据置型の録音機とコンデンサーマイクで録音する訳である。この場合虫を野外の条件にしてやらねば鳴かないので、電熱器で室温を上げたり、湿度を適当に調節したりして居住性を野外と同一にしてやるように録音したものは野外で録音したものと感じが異なるので、これに山でグランドノイズのみの録音を採ってきて虫の鳴声とミックスし山で録音した様な感じにして放送する。

山へ入ると時々興味ある現象に出会うことがある。

大阪の南に金剛山という標高1125mの山がある。楠正成と凍豆腐で有名な山であるが、昨年8月に山へ出かけた時の事。千早口から10キロほど山へ入ったあたりで蝉しくれの中にまじって妙な声が聞こえてくる。耳をすますとどうも猫の様である。こんな山の中に猫が居るのは妙だとは思ったが気になるので声のする方向を探してみたが猫の子一匹居ない。ところが妙なことにこの声は樹上から聞こえてくるのである。上を見上げるとカケスが一羽どうやら正体はこのカケス君らしいのである。カケスが

真似鳴きをするのはよく知られているが、猫の声まで真似るのは誠に興味深い。植物に狂い咲きというのがあるが野鳥の場合にもそういった事実を少ない例ではあるが見ることがある。一昨年12月、和歌山県の本宮に入った時、冬期であるにもかかわらずコヨシキリ、メジロ、ルリビタキ、のさえずりを聞いた。冬には地鳴しかなければこれらの野鳥が自分でも変だと思いつつながら地鳴きを

2 野鳥録音における技術的考察

録音は出来るだけ目的の音のみ正確に。(忠実度)はっきりと(明瞭度)。録音しなければならない。勿論例外もあってわざと音をくずす場合もあるのであるが、自然界の録音に関しては、記録、保存、という面からみてもこれは重要なことである。スタジオに於いては何ら制約を受けないので現在の最高技術を駆使した録音出来るのであるが、自然音の録音の場合は、野外に出て山や川を歩きまわる訳であるから何よりも、軽量で比較的構造の簡単な録音機が要求されそのためには或る程度忠実度が悪くなるのも致し方ない現在NHKに於いて外録音に使用しているものはソニーMT-3型(重量約8Kg,ゼンマイ駆動,テープ走行19Cm/sec, シングルトラック, s/n45~50db)で通称デンスケと称されているものであるが、これの周波数特性が約200~4000 c/s フラットでスタジオ据置のST型50~15000 c/s フラットに比較し、格段の開きがある。コノハズクの声が1000c/s附近であることは良く知られているが、野鳥の周波数帯域が大体500~7000c/s位の中域から高域にあり、我々になじみの深い燕雀目の小鳥はほとんど3000 c/s以上である。このため3000~5000c/sに20db(10倍)のピークを持つクリスタルマイクを使って高域を保障している。しかしこのマイクはハイインピーダンスであるため1~2m位しかマイクケーブルをのばせない欠点がある。マイクケーブルを長くのばせるロウインピーダンスのムービングマイクは特性が大体フラットなので、これで収録した場合は帰局してからイコライザーで4000c/s以上を保障し放送に出すことが多い大体野鳥にしる様々な動物にしる、相手は大自然をとびまわっているものであり、非常に鋭敏なものである。この様なものを相手に声を録音することは容易なことではなく、如何にはっきりと大きくつまり雑音を少なくして信号を大きく、明瞭度を高く録音するかということが野鳥録音の鍵となってくるのである日本の山々には至るところ川が流れており、又川の傍に野鳥が居ることが多い。この音が鳥の声より大きいとマスキングエフェクトにより野鳥の声は川の音に消されてしまうのであるが、耳にははっきりきこえている様でも、録音してみると川音ばかりで鳥の声はききとれないこと

交えてさえずっているのは誠に興味深い。熊野三山に囲まれ、黒潮の影響を受けている暖国の面白い現象である。頃は春、長い冬の間に大自然との斗いに勝ち抜いた小鳥達がもう下草の茂みや、庭の小枝にやって来て春を欣歌している。今年も又、録音機をかついで山へ出掛け様と思っている。面白い話や珍しい体験に出会したら又紹介したいと思う。

(NHK効果団)

伊丹政太郎

がある。これは人間の耳が選択性を有し、物理的に同じ強さの音でも、脳において目的の音を強く感じる事が出来るからであり。そして耳には1000c/s~4000c/sにピークがあるが、対する録音特性の方はフラットなので川音の様な幅の広い周波数成分を持っているものに対しては耳に感ずる大きさと、マイクロホンに感ずる大きさが小鳥と川音といった相対的な位置にある場合異ってくるので注意しなくてはならない。川音やグラウンドノイズの他にモーターノイズ録音機からのパルプノイズ等があり信号対雑音比(s/c)という言葉で現わされるが、これらのノイズが信号に対して大きいと明瞭度が害われる。しかしこれらのノイズは放送用機器においてはほとんど問題にならないので我々の場合は外界からのノイズを如何に処理するかということにある。野鳥の声の「音の大きさ」は大体40~70デシベルであるが、距離が10倍遠くなると20デシベル小さくなる。(つまり大きさは1/100となる)野鳥の声そのものは決して小さくないのであるが、録音する場合は大低距離が離れている事が多く、距離がつくと音のエネルギーが弱くなるので良好な録音を得るために種々の操作をしなければならなくなる。マイクロホンを音源に近ずけるのがs/nの点からも最も良いのであるが羽根のある相手では限度がある。通常MT型で録音する場合、録音レベルをフルタップで使用するがこれもs/nの関係で限界がある。それに虫の鳴声や或種の小鳥に非常に高い周波数で倍音の出ているものがあり基音は正常でも倍音で歪むことがあるので録音レベルに関しては適当な値を選ぶ必要がある。そこで大低の場合集音機を使用するのであるが、集音機というのは一種の音響反射鏡で、凹面鏡の如き働きをする。移動用のものは直径45Cm。腕状をしたもので音波を反射板で反射させ一点に焦点を結ぶ様にしたもので焦点にマイクロホンを位置させる構造となっている。これを使用すると相当遠くの音でも収録出来るのであるが、大体200 c/s以下で指向性がなくなるために過渡特性が出てその附近の周波数を強く収録するため独特の雑音が出るしかしこれはフィルターを通すことにより、カット出来るので小鳥や虫の如き高い周波数の音を収録する場合ほとんど問題にならない。

(NHK効果団)

冬の山小屋40日

—唐松小屋—

上条幸

2月1日 風雪 風向西 風力D

風力の分け方

- A……そよそよと快良風
- B……やや強く感じる風
- C……行動するのに不自由を感じる風
- D……立って歩けない程強い風
- E……四つばいになっても飛ばされそうな風

風雪の中を八方尾根を経て小屋まで2回荷上げをする
今日より3月10日までの私の食料である。

2月2日 AM快晴 西 D PMガス C

小屋の中の雪をだすだけで一日が終る。

2月3日 AM快晴 西 C PMガス北西 D

朝7時昇ったばかりの陽をあびて唐松岳頂上まで散歩がてらでかける。頂上より約50m下の所が思いの外雪が深く、更に唐松沢に向かって巾10m長さ30m位の雪どりができ、やむなく南側を捲いて、ややもすれば首まで入ってしまう中をラッセルして頂上着が8時半。

2月4日 AM風雪 西 D PMガス深し

2月5日 風雪 南西 D~E

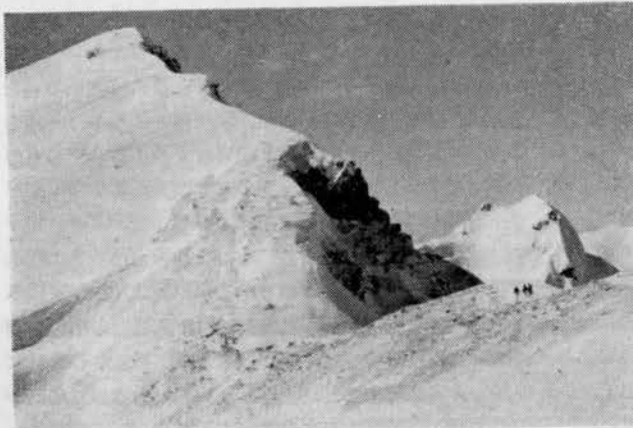
2月6日 雪 西 C 夜半より 西 E

2月7日 雪 北西 B

2月8日 快晴 西 A

4日間荒れ狂った天候も今日はまったく嘘のように晴れわたり、剣、立山連山がどっしりと青空の中に浮き上り、絵の如くと云う形容詞を一人じめにしているような感じがする。

自分はあたかも大自然のパノラマの中にとり残された



唐松岳



筆者 (唐松小屋にて)

微生物の様に感じ大空に飛び立ちたい気持ちになる。

2月9日 AM ガス西 D PM快晴 西 D

2月10日 AM 快晴 西 A PM高曇 南西 C

2月11日 ガス 時々雪 西 C

2月12日 風雪 西 E

2月13日 曇時々雪 西 D

2月14日 曇時々雪 西 D

2月15日 曇時々雪 西 D

2月16日 雪 西 C 時々 E

連日の荒天にいささか退屈する。飯がうまく煮えないので石油コンロとコッヘルの間で一斗缶のフタを挟み間熱でやってみる。なかなかうまく煮える。

2月17日 風雪 時々晴 西 C

体を動かすのがめんどろになり、フトンにもぐり込んで飯も食わずに寝ていると、枕もとにネズミがチョロチョロしている、こいつは良い話し相手が来たとはばかりに首を起すと、とたんに逃げてしまった。午後3時半岐阜のK会一行4名が小屋に来る。久しぶりに聞く人間の声になつかしい。

2月18日 ガス深く風雪 北西 C

小屋の入口は雪で埋っている。スコップを手にすると突然ネズミが、あしもとを通って雪の中に逃げ込んだので良く見ると、階段の所まで入り込んだ雪に小さなトンネルができていた。穴に沿って雪を掘り進んでみると小屋の外に通じている。更に掘り進んだが風雪の為穴を見失ってしまった

2月19日 風雪 北~西 E

朝8時目がさめるといやにフトンが重い、二重

窓は雪が一杯つまっているの部屋は暗く、最初は気が付かなかったが、タバコに火をつけようと手を出すと、どこからか吹き込んだ雪が、フツンの上にたまっているのではないかと窓側の足の方の上に10Cm位、エリ元には5Cm、ガッチリと目張りをして風も入らない部屋なのにと、いささかあきれ果てた。

2月20日

ガス時々晴 西 C

1昨日除雪した入口も又元の様に雪が積ってガッチリしながら、ふと、ネズミはと思つて見ると前と同じ所にやはり穴があるではないか。急にうれしくなってペーコンの切れはしを穴の入口から点々と部屋まで置きフツンの中でラジオを聞きながら、今か今かと待っていると、ネズ公の奴、ラジオの音など全然気にせず部屋の中に入って来る。2匹だ。良く見ると家のネズミより一まわり小さく、ネズミ色ズバリの色である。(暗いのでハッキリしないが……)少々顔を動かす位ではたいして驚きもしない様子だ。体を起すとサッと穴に逃げ込むが又すぐ出て来て部屋の中をチョロチョロ歩き、カンパンのカケラを両手で持ち、後足で立ってガリガリ食い、たえず首を動かしてはこちらを見る。俺の目と合ってもまるで平気でドタバタ2匹で動きまわっている。まったく可愛い、連中だ。

2月21日 風雪 西 E

2月22日 曇 西 C

2月23日 快晴 西 C PM4hガス

湯の目を見るのは10日以来13日目、毎日ネズミを相手にフツンのエリ元が吐いた息でガチガチに凍った中で生活していると、時々大声でドナリたくなる。久し振りの好天に五竜まで足をのほして見た。「雪山の様に美しい雪山」と云う他はない。小屋のすぐ東側にカモシカの足跡を見る。鉄砲を撃った様な音を発してナダレが発生している。

2月24日 曇時々雪 西 D

2月25日 高曇時々薄日 南西 C

2月26日 風雪 時々切間 西 D~E

小屋の外に出ると突風にあおられ飛ばされそうでとても立ってられない。四つばいになつても息がきず、



不帰の嶮を行く

よくまあこう強い風が吹くもんだと感心する、

2月27日 風雪 西 D

2月28日 快晴 北西 B

カラット晴れわたった峰から八方尾根を見下すとスキーに来た連中か、ボツンと黒い点が下の方に動いている登って来るらしい、小屋に帰ってお茶を沸して、来るのを待ったが途中で引き返したらしくついに来なかった。

3月1日 薄曇時々晴 西 B

3月2日 風雪 西 D

3月3日 ガス時々晴 西 C

スキー客が5人登って来た。第3ケルンから下は微風快晴との話しである。30分位休んですぐ下ってしまった

3月4日 ガス 西 C

3月5日 晴 西 D

3月6日 ガス 西 D

3月7日 ガス 西 D

O, Y, Kのサポート隊4名が八方尾根より小屋に入る。本隊が白馬より来るとのこと。又S大学山岳部一行が遠見尾根から来、K大及びT大が八方より入山、小屋に入る。今迄沈黙を守っていた唐松小屋もいきなりにぎやかになった。

3月8日 晴 西 C

3月9日 AM 晴 南西 C PM曇 西 D

3月10日 晴 西 B

O, Y, Kの一行5名が五竜へ向つた後はS大が外にテントを張つてあるだけ、又小屋は以前の静けさに戻つた。今日は里から交替が3名登って来るはずだ。俺はすに下つて一カ月のアカを落し、やたらに伸びたヒゲを里で、熱燗で一杯きゅーとやりながら、弁当箱位のビフテキにガンブリとかじりつきたい。

第六回 全日本登山体育大会に参加して

久保田 稔

山 行

△期日 昭和37年2月10日～14日

△場所 北海道東大雪山系ニベツツ山

北海道へ

「先づ北海道だがね、さいはての国なんていうが近いもんだよ、オール特急で行けば丸1日とはかからないもの我々の行った帯広まででさえ、青函連絡船が一寸エンジンの故障で遅れたけど1日と3時間位だものね」

「青函連絡船はどうでした？」

「うん、快適だった様だね。乗ったのが何せ行きも帰りも最夜中でね。すぐぐうぐうさ、4時間半ばかり乗るんだが、それこそ大船に乗った気持ちさ」

「いただいた絵ハガキには雪が全然ないなんて書いてあったけど本当？」

「うん、驚いたね。暖冬だとは聞いていたが帯広市内には全然ないんだ、車窓から見ても他の所にはあるにはあったけど少いね、大町と大して違わんですよ。そこへゆくと新潟や秋田はすこいね。それでも着いた晩に申し訳程度に積ったよ。あの辺は大雪山系へみんな降ってしまらんじゃないかな」

開 会 式

「開会式は素晴らしかったよ、先づ自衛隊の音楽ね、それから県名を書いたプラカードを持った女学生、その後から岳運旗をおたてて市中行進さ、花火は景気よくあがるし、窓という窓からは盛んに紙吹雪が舞うしね、いい気分だったよ。だけど行進そのものはあまりいかさなかったね、どうひいき目にみたって山男スタイルでドタドタ行進している態は立派じゃないよね。」

開会式場ではね、ちゃんとして聖火を灯してね丁度黄昏時でね、昨年の開催地九州から北海道岳連へ聖杖の引継ぎがあったり、雪山讃歌や雪のふる街を合唱したり、何となく感激したよ」

「それじゃオリンピックなみね、向うの人達どうでした？、親切？」

「観迎してくれましたよ、開会式の後では牛乳と茶菓ね入山した幌加駅では牛乳、下山した十勝三股という寒村じゃ北海道名物のジャガイモと豚肉のたっぷり入った豚汁を井で食べ放題でね、これはうまかった。それにも増して嬉しかったのは、そこの駅前でもね20人位の小中学生が寒さに震えながら雪山讃歌を何回もくりかえして一生懸命歌ってくれているんだ、父兄も数人一緒だったなァこれにはグッときちやったね、それに長野県出身の人も多い様だね、特に通信、救護班として活躍した自衛隊の人達の中なんかにもね、大勢声をかけられましたよ」

「それで肝腎の山の方はどうでしたの？」

「いやー、それがねさっぱりなんだ。オールスキーを使うことは始めっからわかっちゃいたんだがこれ程とはね向うじゃスキーが足なんだね、こちらのワッパと同じさはけるだけはくと言うんだ。初日は入山式がすんで二時間位は空身で歩いたんだ、ザックはトラックで運んでくれたんでね、昼食を済ませてからスキーはシールをつけてザックを背負ったんだが、こういった経験はあまりないでしょう。おまけに短かくて巾の広い山用のスキーを借りて持っていったんだが、こいつは北海道の山じゃ使えない物にならないんだってさ、シールは長すぎてうまくつかないし、オーバーシューズをつけたら時々はづれるし雪は軽くて深い、その上我々の荷は一寸重すぎたし、もうさんざんだったよ、これは我々に限った事じゃないんだけど——。また天気も良くなってね、午前中はクリジョン、午後は雪、風もあったし、結局予定の1500米地点には幕営出来ず1200米位の所に幕営さ、夜半には強風が吹きまくるし、いささか先が思いやられたよ、天気図を書いてみたけど芳はしくないね。」

翌日はそれでもやゝ青空がみえたりしたし、スキーにもいくらか慣れてきたので森林帯を歩くのはまあまあだったが、ナイフリッジとまではゆかなくてもやせ尾根を横向きになって歩いたり露岩の上を歩いたりしたのは一寸こわかったよ、そんな所を一時間半位歩いて広い斜面に出たんだが、こゝはもっぱらジグザグ登行でね、キックターンの連続で、こゝでは山スキーが威力を発揮してくれたが、それも始めのうちだけで、稜線近くになると風は強いし、足は疲れてくる。雪はザラザラしていてエッジは良く動かないし苦勞したよ。稜線へ出てスキーをはづした時は正直の話ホッとしたね、ハイ松の中を15分位歩いてまたスキーさ、でもほんの少いで雪洞地点に着いたんで助かったよ、そこは森林帯の中だけけど割合広い場所だね、他のコースからきた連中も一緒にぎやかなもんだった。2日ネンネするんで広々とした雪洞を廻ったんで時間も食ったし、本当はほめられた事じゃないんだ。

3日目はいよいよニベツツ山をアタックするというんでね。今までは良い所がなかったがアイゼンとザイルワークだったらまかしとけと張り切ったんだが、相も変らぬ悪天候さ、西高東低型つちゅうやつで典型的な冬型の気圧配置なんだ。指示あるまで雪洞中で待機なんてんで結局強風について出発したのが正午なんだ。それもわづ

が一時間余り行動して小天狗山といってこれからニベソツ山の登りにかゝろうという所で終りさ、顔面を凍傷にやられたのが十数人も出たんで、リーダーがこれ以上上へ行ったらどうなるんだと心配したらしんだねニベソツの頂上は良く見えなかったけどその稜線はずーとナイフリッジで左側は鋭く切れ落ちていてなかなか立派な山だったよ、それだけに頂上まで行けなかったのは残念だったね、もし、各パーティー自由にアタックしろといったら、その日位の天候だったら我々はやったと思うね。現に地元の先発隊の連中が十数名朝早く出て登ったらしいんだ。

最終日の下りはもうお話にならんよ、ゲレンデでさえまともに滑れぬ者が、デカイザックを背負って森林帯の中をスイスイなんてとてもじゃないよ、転んだら最後雪の中ヘスッポリだ。それでも何だかんだいゝながら無事下ったよ。十勝三股近くではアゴを出して自衛隊さんのジープの御厄介になった人も数人いたけど、こちらは体力時にはそうバテなかったね」

交 談

「チームワークなんかは良かったの？」

「うん、長野県からは三人行ったんだけど、他の二人は長野の人で、岳連の関係でちょくちょく会っていた人達だからね。長野県という他県の連中が一応マークするんだね、それでこっちも他の県の連中になんか負けるもんかと言っていたんだけど、とにかくスキーにはまいったね、それからはそんな事云っていませんで積極的に学んで帰ろうじゃないかってことになったんだ。結局それが良かったんだね、地元の人達には好感をもたれた様だ。閉会式が済んでから北海道の役員や選手の人達と飲みながら十二時近くまで話し込んで我々の宿の方をあらゆるジャッタウトを喰らう所だったよ、ま、ざっとこんな様なわけだ、そのうちに写真も出来てくるだろうし、あまり大げらに出来ない様な面白い話もあるしそれはこの次にしようか。」(ニベソツ山=しなの木の面白い茂る山の意)

(大町山の会)

コカワラヒワ

毎年春先になると早く春の姿を見たくて、暇を見つけては山野をあちこちと出て歩くのが習慣になってしまった私にとって、この鳥の嘯りは春の喜びの一つになってしまった。

3月の始めといえばまだほとんどが雪の下にあり、たまに雪が消えた土手はあっても草花はまだかたい蕾でキノトウもまだ半分も土の中に入っていて芽を出すには寒さがきびし過ぎるのどかな日が1日はあっても次の日は吹雪の寒さがまた来ることを彼等は充分に知っているからであろうか。

でも川端のネコヤナギが帽子をぬぎ、ぼつぼつと黒い土手が、枯草の野原が雪の下から現れて来る頃になると漂鳥の仲間のこの鳥は早くも春の声を聞かせる。嘯りで春先一番早く聞かれるのはこの鳥とホホジロであろう。ホホジロなどは小春日和の初冬の頃にも多少聞かれるがコカワラヒワの澄んだ嘯りはやはり本当に春の来たことをつける声である。雪の欠乏期から解放された喜の声にも似た美声は春先の春とはまだ名ばかりの、それでも日射はすっかり強くなった日、彼等の蕃殖地である神社やお寺の高い杉の木の梢から始る。コロコロ、キリキリ、ビューインと澄んだ美声を張り上げる。そしてこの声が何処に行っても聞かれるようになると草が芽を吹

長 沢 修 介

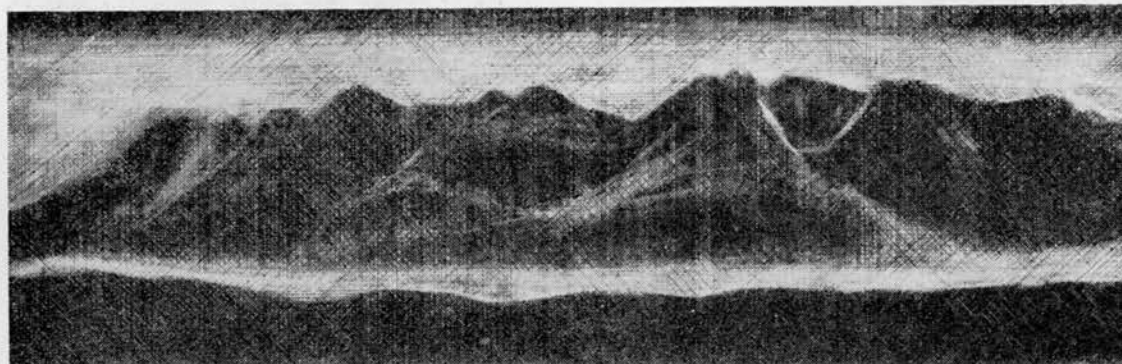
き始め本格的な春が来るのである。

年間を通じてほとんどが植物質を食べ約80%以上は野草の種子を食していると言われ。そのため雛の胃も他の鳥の雛よりもずっと強く出来ていて雛の時代からもう固い植物の種子を多量に食べている。スズメほど数は多くないが農家からは嫌われる鳥である。冬季に雪の少ない河原で群って採食するのでこの名が出たらしく、冬鳥のオオカワラヒワも混って冬は生活している。



北海道北部のねこ柳

渋谷正己



北海道の北部はまだ寒く春はまだ雪におまかされて
いる。

2m近い積雪の中に鳥や虫類も、そして木や草もあら
ゆるものが着々と春をめざして進んでおり。木の枝にふ
りつもった乾いたさらさらの雪もおち、南側の斜面はし
っとりと水気をふくんだ所も見つける事が出来るのです
このような早春の北海道、そして上川の町は大雪山(ヌ
タカムシユツベ)を南に望む事の出来る町なのです。

この上川町を流れる石狩川にそくく小さな沢は町の中
から1.5Kmくらいならかに北に向っている。この沢の
上流は、さしわたしが5~600mの円形のなだらかな南向
の斜面になっている。

夏には草の生えている中に3mばかりの柳、それとあ
まり大きくないガンビ(白カバ)があるのです。

この柳が今年もやがて白く開花する事でしょう。だ
が、これらの柳が雪をかぶったように白くなるのはまだ
まだ先の事なのです。今はまだ小さなつやつやした褐色
のつぼみの中にとじこもっているのです。

ここにある数十本の柳を一本一本見てまわってみると
やはりその中にも気の早いのもあると見えて、大きな蕾
がみられるのです。そしてこれらの柳の芽をのぞいてあ
るくと次のような事を見る事が出来たのです。

ねこ柳の蕾の大きさと割合(3月10日観察)

蕾の大きさ	全体の木の本数の割合
大 11~12mm	4~5%
中 7~8mm	20%
小 1~5mm	75%

大きさは蕾の縦の長さ。

この中で大きな蕾は10個くらいは褐色の蕾がわれて中
から白い毛が見えている。そしてこの大きな蕾のついて
いる枝にはいくつかおきに、小さな蕾が不規則についで
いるのが見られ、それらの小さな蕾は他の小さな蕾はか
りのついている木のものと同じようなのである。

春の雪の中にあるこれらのねこ柳の芽も春の日ざしの
入る家の中にあると、2~3日でかたい蕾を開いて白
い毛におまかれたねこ柳が出て来るのである。

小さな蕾をむりにおしひろげて出て来たこの白いねこ
柳はかたいからの形がついていきりの形のようになっ
ているのである。その毛はまだかたくはりついたような
感じなのです。その大きさは蕾の大きさの数倍の大きな
ものになっている。

大きなつぼみの方は、かたいからを出てしまうとふつ
くらしした毛になり、数日もするとそのやわらかい毛の
間から、雄しべや雌しべが黄みどりから、だんだんと黄色
に変わって行くのです。上川町標高は350m、それより
250m高い600mあまりの所にある柳はまだ4月初旬まで
は吹雪にさらされる事もあり、また-20° くらいの気温
にさらされる事もあるのです。これらの柳の芽はまだま
だかたい蕾の中にとじこもっていなければならぬのか
も知れないのです。そこから手折って来た柳の枝には白
い花をつけ窓越しに入っている光を受け、まだ水にとざされ
たヌタクの出々に対してののです。

(版画はヌタカムシユツベ)(北海道 上川中学校)

お願い 本紙の購読ご希望の方は1カ年購読料20
0円(郵送料とも)を現金書留または郵便為替、
郵便切手で長野県大町市、大町山岳博物館あてご
送金下さい。 大町山岳博物館

山と博物館 第7巻第3号 1962年3月25日発行

発行所 長野県大町市TEL(大町)211

大町山岳博物館

印刷所 大町市上仲町

信州印刷大町工場